

安全で、うるおいのある川を目指して

多くの人たちに限りない恵みを与えている鬼怒川。しかし、かつては“あばれ川”と呼ばれ、水との闘いが太古より繰り返されてきました。その鬼怒川の改修工事に国が着手して、今年で80周年を迎えます。これを機にこれまでの洪水との闘いや、地域の歴史を振り返るとともに、多くの先人たちの努力に感謝しつつ、明日の鬼怒川について考えてみましょう。

鎌庭捷水路の開削工事に着手

明治時代、鬼怒川流域では洪水が相次ぎました。特に明治43(1910)年8月の洪水では、鬼怒川も含め関東全域で浸水被害が発生しました。この洪水を契機に、利根川改修計画が改訂され、16年後の大正15(1926)年に鬼怒川改修計画が策定されました。この改修計画に基づき、昭和2(1927)年、今から80年前に鬼怒川改修事務所が設置され、国直轄による鬼怒川の改修事業が始まりました。

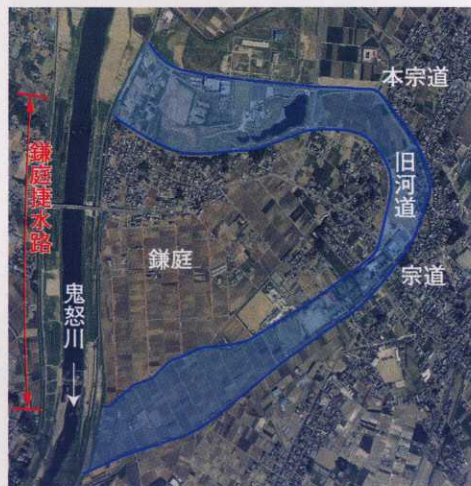
計画の大きな柱は、上流の栃木県三依村(現・日光市)へのダム建設、蛇行が甚だしい河道の改修、洪水調節のため調節地の築造の3つでした。

その中で、まず最初に行われたのが「鎌庭捷水路(かまにわしょうすいろ)」の開削工事で、昭和3(1928)年に着工されました。

鬼怒川は、茨城県の下妻市鎌庭付近で大きく曲がりながら流れていたため流れが悪く、たびたび洪水の被害がありました。また、ここには宗道河岸があり、洪水時は激流がぶつかり河岸の維持にも苦労してき

ました。

そこで、鎌庭地先から下流に向って、真っ直ぐに流れる新河道を開削し、従来4,400mあった河道を2,050mに短縮させたのです。鎌庭捷水路は、昭和10(1935)年3月に通水しました。



青山士が主任技師として担当

鬼怒川改修事務所の初代主任技師となったのは、我が国の土木事業に大きな足跡を残した青山士(あおやまあきら)です。明治36(1903)年、青山は東京帝国大学土木工学科を卒業すると渡米。そして明治37年より45(1912)年まで、唯一の日本人技師としてパナマ運河開削工事に携わりました。帰国後、内務省に土木技師として入省し、荒

川放水路の建設工事を指揮しました。

当時、帝大卒の高等官は設計だけを担当し、現場に立つことはめったになかったといえます。しかし、青山は足にゲートルを巻き、作業服姿で毎日のように工事現場に出て、監督指揮にあたりました。腰にぶら下げた手ぬぐいがトレードマークだったそうです。

当初、鎌庭捷水路は、計画流量を流すのに最も



80年の歩み

●大正15(1926)年12月

茨城県結城郡宗道村(現・下妻市宗道)及び栃木県河内郡本郷村(現・河内郡上三川町)に改修工事のための測量員詰所を開設。

●昭和2(1927)年2月16日

茨城県真壁郡伊讃村大字伊佐山(現・筑西市伊佐山)に鬼怒川改修事務所を設置。

●昭和8(1933)年4月1日

茨城県北相馬郡山王村(現・取手市山王)に小貝川改修事務所を設置。

●昭和39(1964)年7月1日

鬼怒川工事事務所と小貝川工事事務所が統合し、下館市中館(現・筑西市中館)に下館工事事務所を設置。

●平成5(1993)年6月7日

下館市二木成(現・筑西市二木成)に庁舎移転。

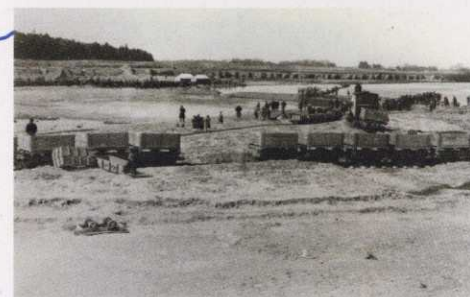
●平成13(2001)年1月6日

省庁再編により国土交通省下館工事事務所となる。

●平成15(2003)年4月1日

下館河川事務所に名称変更。

下館河川事務所は、鬼怒川約99.6km、小貝川約81.9km、合計181.5kmを管理。関東地方整備局管内で最も長い区間を担当しています。



▲茨城県結城郡千代川村
鎌庭捷水路通水当日(昭和10年3月17日)

効率のよい幅や深さ(最小の工事費となる断面)で計画されていましたが、青山は「大自然の力に抗ってはいけない。むしろ、そのエネルギーのスムーズな変換を追及すべきで、それが人類の英知である」と語り、河道の幅や深さなどについて、さまざまな工夫をしたそうです。

参考文献:『技師青山士の生涯』(高崎哲朗著・講談社)、『山河の宴奏曲』(高崎哲朗著・山海堂)、『現代日本土木史』(パナマ運河建設に参加した日本人・青山士・高橋裕著・彰国社)など。